

潟語り (十二)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

遭難しかかったこと

さまざまな気象条件が重なり、潟の水面に約十センチも雪が積もって遭難しかかったという大崎地区の三浦了四郎さん(六九)。その時の状況についてうかがいました。

潟に十センチ近くも雪が積もった

昭和三十一年の十二月十四日だったな。あの日は朝の八時頃に一人で船をこいで建網を揚げに行ったんだ。下を見て網を揚げているうちに雪が降り始め、揚げ終わって顔を上げた時は回りがまっ白。どっちが大崎なのか、まったくわからねぐなってしまった。

さらに悪いごとに、あの日は風も波もまったくなしで、潟の水面に十センチ程も雪が積もってしまった。今でいうシャーベット状というやつだ。こうなってしまえば船のガワに雪がくっついて、なんぼカイをこいでも船は進まねもんだ。でも発動機の船は振動があるもんだから雪もつかねで進む。当時、大崎には発動機付きの船は四そう位しかねがったな。

風が吹いて雪ごと船が流されれば、もっと沖に出てしまう。俺は船に積んでいた竹棒を潟に刺して、それに船を固定した。これは持久戦になると思ったので、カップを着て船にどっかりねまって天気の回復を待つことにした。そのうち雪は小降りになり、遠くに発動機付きの船が見えたん

だ。竹の棒に網の切れっ端を結んで、これを振りながら必死になって「助けでくれー」って叫んだ。この船は同じ大崎の人のもので、こっちに走って来たのを見て、「ああ、助かった」と思ったな。途中まで来たら、心配した兄きが発動機の船で探しに来てくれた。普段だったら九時過ぎに船着き場に戻るとも、あの日は昼の一時を過ぎでだ。

私もあの日のごどは忘れられねな。結婚したのがあの年の十一月。一カ月もただねうちにあの騒動だすべ。当時は本家に住んでいだども、おばあさんが「この雪だば、あぶねなあー」って言うもんだがら、本当に心配だった。んだどもあの時は、大きなフナッコ、いっぺ積んで戻って来たなあ(笑)。へテルエさんの話



あの頃は、魚で飯を食おうと思っていたども、まもなく

干拓たべ...

了四郎さん

奥さんの

テルエさん

あの時だば

本当に

心配したよ!

取材用にと親切に建網を畑にセットしてくれた。